

らここで、“人々の前でイエスと同じことを言う・イエスに同意する”ということは、“イエスの前でイエスと同じことを言う”、即ち、“イエスがその場所にもいないでも、自分を迫害する人々の前で「イエスを信仰する」と公に言い表す”という意味になります。迫害が起きている世の中では、イエスを信仰する人々の命を奪う者たちが現れますが、“それでも、何時であっても、イエスの自分の仲間である”、即ち、“イエスの語ることに同意し、自分の信仰を正しく告白する人”を、イエスもまた“神の天使たちの前で自分と同じことを告白する者だ”と言い表してくださるのです。「人の子」とありますが、勿論ここで言う「人の子」とは“イエスご自身”のことです。そのイエスが天の父なる神の天使たちの前で、ご自分への信仰を言い表す者を、ご自分の“仲間である”と言ってくださるということは、“その人の名前が命の書に記されることの宣言”となるのです。“信仰を隠すことなく、人々の前で公然と言い表すこと”、それを主イエスは弟子たちにも、そして私たちにも求めておられます。

前回の説教で、私は“この日本においてはキリスト教に対する迫害はない”と申し上げました。確かに、“私はイエスを神の子と信じます、キリスト教を信じています”と公に告白したとしても、命を奪われることはありません。しかしどうでしょう。皆さんはご自分が“キリスト教徒だ”ということ、どんな場でも、どんな人たちの前でも、はっきりと宣言することができるでしょうか。

この信濃町教会の信徒の方々は、100年以上に及ぶ教会の歴史の中で、信仰の先達の皆さんの確かな信仰者としての歩みを見て、ご自身の信仰を養われていらした方々ですので、どんな場でもはっきりと、“私はキリスト者です”とおっしゃることがおできになるでしょう。私も牧会者として歩み始めてからは、“キリスト者である”ということに抵抗を感じなくなりましたが、一信徒として拙い歩みをしていた時は、つい相手の、そして周りの人の様子をよく観察してから、“大丈夫だ”と思うまでは、クリスチャンであることをなかなか言い出せませんでした。しかしそれではいけないのです。イエスが求めておられるのは、何時、どんな時でも、そしてどのような人が相手であっても、はっきりと“自分は主イエスを神の子と信じる”と言い表すことなのです。

そのことが如何に大切であるかということは、9節を読めばわかります。「人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の天使たちの前で知らないと言われる。」たとえ“イエスの前でイエスを信仰する”ということを告白しても、他の人たち、例えば、“自分の命を奪おうと狙っている迫害者たちの前でイエスを否定するならば、イエスもまた、天の父なる神の天使たちの前で否定される”のです。“このような人は知らない”とおっしゃるのです。父なる神の天使たちの前でイエスによって否定されるなら、私たちは『命の書』に名前が記されることはありません。罪が赦されることも、永遠の命を得ることもできません。私たちの信仰はイエスの前でだけでなく、迫害者であろうと思われるような人々の前でさえも、イエスを告白し、その信仰を言い表すことが必要なのです。

『ルカによる福音書』の著者『ルカ』と言えば、“医者であった”であろうということがよく知られていますが、私たちがもう一つイメージとして持っているのは、“聖霊についてよく語っている”ということではないでしょうか。しかし実際には、ルカが『聖霊』という言葉をもっと多く書き記すのは『使徒言行録』においてであり、福音書においては、聖霊が与えられることを約束される11章13節と、あとは本日の箇所12章10節と12節だけです。ペンテコステにおいてよく読まれる使徒言行録2章での聖霊が下される場面の印象があまりにも強いので、私たちは“ルカ = 聖霊”と考えがちですが、福音書で

は聖霊についてあまり語っていません。しかしそのルカが福音書で『聖霊』という言葉をもっと使っている本日の箇所は、ルカの聖霊への考え方がよく分かる箇所とも言えるでしょう。

10節で、イエスは「人の子の悪口を言う者は皆赦される。」と言います。この言葉は、その後にイエスが語る“聖霊に対する冒瀆”との対比を明らかにするためです。イエスへの悪口も赦されるものとは私は思いません。しかしイエスに対する悪口以上に深刻で問題なのは“聖霊に対する冒瀆”です。「冒瀆する」とは神を汚す言葉を言うことを意味します。神から与えられる聖霊に対して、それを汚す言葉を言うということは、神そのものに対しての冒瀆であり、まさにここには“神に対する罪の深さが現れている”と言えるでしょう。また「赦す」という言葉(ἄφικε)には二つの意味があります。“或る出来事がこれから起きることを赦す”という意味と、“かつて興ったある出来事を赦す”という意味があります。つまり神は、“人間がかつてを犯した罪をイエスの血によって赦す”というだけではなく、“今後、人が罪を犯すこともすでに赦してくださっている”のです。人間はどれほど“私は罪を犯さない”と言っても罪を犯してしまう者です。全てのことをご存知の神は、そのような人間がすでに犯してしまった罪も、“これから犯す”であろう罪も、全てを赦してくださるのです。

11節以下には、迫害にあった時、どうすればいいかがイエスによって示されています。『会堂』とあるのはユダヤ教のシナゴグ(συναγωγή)のことですから、これはユダヤ教徒からの迫害です。会堂は礼拝と教育の場ですが、イエスを告白する人が迫害の時には鞭打たれる場でした。迫害とはこれだけではありません。ユダヤ人以外の人たちからの迫害、具体的にはローマ帝国による迫害が挙げられます。“イエスを主と告白する人たちは”ローマ帝国の役人や権力者たちのもとに連れて行かれ裁きを受けることとなります。その裁きの場において、“イエスを告白する人たちは”、弁明の機会が与えられますが、イエスによれば、その時に“何をどう言い訳しようか”、“何を言おうか”などと心配してはならないのです。心配をすればするほど語るべき言葉を探して、心はバラバラに分けられ乱されてしまいます。人間にはそのような時に語る言葉は見つかりません。どう考えても語るべき言葉を思い浮かべることができないのです。迫害の場で語るべき言葉を与えてくださるのは神によって与えられる聖霊にだけできることです。聖霊が与えてくださる言葉を、ただその時に語れば良いのです。心配は無用です。言うべきことはただ聖霊だけがご存じで、その言葉を与えてくださいます。

そもそも聖霊とはどうやって与えられるか思い返してみましょ。聖霊はイエスが天に上げられた後に、私たちのもとに送られてくるものです。イエスが去ったこの地上で、私たちが力を与えられ、強い信仰を持って生きていくことができるのは神によって与えられる聖霊の力のおかげです。私たちは聖霊の力なくしては何事も行うことはできません。今までも罪を犯し、これからも罪を犯すであろう存在です。神の御前に進み出ることすらできない存在と言ってもいいでしょう。

この信濃町教会で毎月第一主日に開かれる『主の晩餐』について考えてみましょう。私たちは本来、この主の晩餐に与えることもできないほど罪深い存在です。しかし聖霊によって清められ、その聖霊の力によって神の御前に押し出されるからこそ、主の晩餐を受け、それに与えることができます。今の私も同じです。この講壇で、主の御言葉の取次の役目を与えられ、そのことを赦されているのは聖霊の力によるものです。聖霊の力がなければ私たちは何もできないのです。私たちはその聖霊の存在を忘れてはなり

ません。

初代教会の人たちは、常に迫害の危機の中にありました。イエスの弟子たちもそうですし、ルカの教会の人々も同じでした。迫害ということがいつか起こるかもしれない未来の出来事ではなく、今まさに目前に迫っている、何時起きてもおかしくない出来事だったのです。そのような中で初代教会の指導者たちは、迫害にあつたらどうすればいいかと恐れる人々を励まし続けました。“イエスが天に上げられ、誰も自分を弁護してくれなくなってしまった今、どうすればいいのだろうか。”きっと多くのキリスト者たちがこの問題に悩み、苦しみ、苦しみ、日々恐れの中にあつたことと思います。そのような人々を励ますためにルカもまた自分の教会の人々に聖霊の助けを語り続けました。より多くのことは、かつて『聖霊行伝』とも呼ばれた『使徒言行録』に記していますが、イエスを主と告白する者たちが窮地に陥った時に、“誰が助けを与えてくれるのか”、“それこそは聖霊なのである”ということ語り、人々に迫害を前にして“恐れることのないように”と語り伝えました。主イエスが洗礼を受けた時、天が開け、聖霊が鳩のように、目に見える姿でイエスの上に乗ってきて、イエスはその聖霊の力によって様々な働きを繰り広げていったように、弟子たちは迫害下にある、まさにその時に、同じようにして聖霊が弟子たちに語るべき言葉を与え、彼らの中から力強く語り出すことをルカは人々に教えました。

弟子たちがこの聖霊によって教えられた言葉によって人々の前で話すのは、ただ単に自分に対する弁明の言葉だけではありません。弟子たちが語るの**『神の国』**の証しであり、この証しが確かなものとして人々の前に示されるために、彼らは人々の前に引きずり出され、鞭打たれ、尊い命を失うことになるのです。しかしそれは単に命を失うということではなく、“**イエスを主と告白し、神の国を証しする**”という大切な役割を負っているのです。

私たち現代に生きる日本のキリスト者にとっては、迫害は無縁の世界であるということを私は繰り返しお話ししてきました。その考えに変わりはありません。しかし、迫害とは言わないまでも、人々の好奇の目に曝されることや、面白おかしく話の材料になってしまうこともあるでしょう。しかしそのような時にあつても、私たちは何も恐れることはないのです。聖霊が私たちの背中を押し、私たちが豊かに包み、力を与えてくださいます。私たちは罪多い者です。主イエスの十字架で流された血によって贖われ、罪赦された者です。しかし尚、私たちは御前に立つに相応しいとは言えない行いをし、また罪を重ねてしまいます。それでも私たちは聖霊によって力づけられ、全てを赦されて、今この礼拝の場に立つことができている、そのことを忘れずに、これからもこの世の旅路を歩んでいきましょう。

共に祈りましょう。

神さま、今のこの時代、私たちはキリスト者として迫害に遭うことはありません。しかし、主を“**救い主である**”と告白することに大きな躊躇いを感じることもある弱く貧しい器です。どうか何時如何なる時にも、“**主・救い主イエスを信じる**”ことを公に言い表すことができる者としてください。そして罪深い私たちが、この世でどんなことも恐れず生きていくことができるように聖霊をお与えください。聖霊の力に押し出されて、この世の旅路を生きていくことができますようにお導きください。

この祈り、救い主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げいたします。アーメン。

讃美歌:342「神の霊よ、今くだり」

献金・感謝(咲花淳子)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

ご在天の父なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝致します。敬愛する大谷先生は通して聖霊なくしては私たちは生きていけない、そのことを、力強く、そして豊かに、この御言葉を与えていただきましたことを感謝致します。私たちがこの一週間を夫々の旅路の中で御言葉を糧として歩むことができますようにお導きください。

私たちは必要な物を与えられ主の僕として生きていることが赦されていることを感謝致します。今夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴を御前にお献げします。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった『主の祈り』を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 92「主よ、わたしたちに主よ」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の豊かな交わりが、私たちの上に、いつまでもありますように。アーメン。

報告:(週報に記載のない催事)修養会委員会 14日(土)午後8時(オンラインにて)

後奏:「われらを神の怒りから逃れさせたもうキリストよ」(H. ディストラー)

